

# 中国語「能、会、可以」と可能補語の教授法について — 知覚訓練法フレーズ・シャドーイングを用いた練習の効果—

張文青

立命館アジア太平洋大学

**概要：**中国語を第二言語として学ぶ学習者にとって、可能表現「能、会、可以」や可能補語の否定形式の習得は難しく、誤用も多く見られる。特に、行為の実現が不可能な状況で用いられるべき否定形式の可能補語の習得は困難である。本研究では、認知言語学の観点から、知覚訓練法であるフレーズ・シャドーイングがこの文法習得に与える効果を検証した。本研究では、40文の中国語フレーズを用い、2週間にわたり各フレーズを4回、計160回のシャドーイングを実施し、事前測定・シャドーイング練習・事後測定の3段階で学習成果を評価した。分析の結果、練習後には誤答数が減少し、正答数にも統計的に有意な改善傾向が見られた。この結果から、連続フレーズ・シャドーイングが可能表現の習得に有効であることが示された。したがって、中国語の可能表現において、実践的かつ効果的な教授法としてフレーズ・シャドーイングの導入を提案する。

**キーワード：**フレーズ・シャドーイング、可能表現、「能、会、可以」、可能補語、知覚訓練法

## *Teaching Possibility in Chinese: 能、会、可以 and Potential Complements —The Effectiveness of Practice Using Perceptual Training through Phrase Shadowing—*

*Wenqing Zhang*

*Ritsumeikan Asia Pacific University*

**Abstract:** For learners studying Chinese as a second language, acquiring the modal expressions “能,” “会,” and “可以,” as well as the negative forms of potential complements is challenging, and misuse is still frequently observed. In particular, this study focuses on the difficulty of mastering the negative form of potential complements that should be used in situations where the action cannot be realized. From the perspective of cognitive linguistics, this paper examines the effectiveness of phrase shadowing—a perceptual training method—on learning this grammar. The study involved 40 Chinese phrases repeated four times each over two weeks, totaling 160 shadowing trials. Learning outcomes were assessed in three stages: pre-test, shadowing practice, and post-test. The analysis showed a decrease in errors and a statistically significant improvement in correct responses after practice. These results demonstrate that continuous phrase shadowing is effective for acquiring modal expressions. Therefore, this paper proposes introducing phrase shadowing as a practical and effective teaching method for modal expressions in Chinese language education.

**Keywords:** phrase shadowing, expressions of possibility “能、会、可以”, potential complements, perceptual training methods

## 1. はじめに

中国語の可能表現は、助動詞「能、会、可以」などと可能補語によって構成され、表現したいこと、説明したい状況によって、母語話者はこれらの文型を使い分けて繊細な意思表示をする。一方、言語事実として、一口に言っても様々な「～できる」があることは否めない。例えば、「能力があってできる、条件があってできる、許可されてできる、習得してできる」がある（相原、1991）。

祝（2015）は、中国語の可能表現は多義性や話す環境・語用に依るという特徴があると主張し、郭（2001）は、中国語では、助動詞の分類は文法上というよりはむしろ語意或いはロジック上のものであると述べている。呉他（2005）、盧（2006）、郭（2014）は、助動詞による可能表現「能、会、可以」と可能補語による状況説明や意思表示では繊細な表現を可能とする一方、外国人学習者にとっては習得しにくい文法項目群であると述べている。

日本の中国語教育の現場においても（本研究では「能、会、可以」と可能補語を取り上げる）、可能表現において「能、会、可以」と可能補語の習得は問題がとも多い。刘（1980）は、可能補語が外国人学習者の中国語習得上の難点となっていることについての原因の一つは、外国語には可能補語と類似するような表現がないからだとして主張している。もう一つの原因として、「能」は可能性を表すことや一部において可能補語を説明する内容と互換性を持つため、完全に可能補語と入れ替えることができるとしてしまうからであるとも述べている。また、可能補語の習得を怠った結果、学習者が可能補語をできるだけ使わないようにしているとも指摘している。これにより、中国語の可能表現に関して多くの誤用が生じている。このような状況を受け、第二言語としての中国語学習者に向けた可能表現の習得を目的とした訓練法を模索すべく、本研究では、知覚訓練法を用いたフレーズ・シャドーイングによる練習を実施した。

本稿のはじめには、中国語の可能表現において、初級、初中級学習段階における外国人学習者が間違いやすい使い方や誤用の傾向を整理し、本研究の目的を紹介する。その次に、「能、会、可以」と可能補語に関する先行研究を概観し、その重要な文法的意味に焦点を絞り、学習者に教授する際に最も重要な点を整理する。次に、中国語可能表現の習得を促すために用いた知覚訓練法の理論的根拠に関する先行研究を概観し、知覚訓練法であるフレーズ・シャドーイングのデザイン及び練習結果を分析する。最後に、可能表現を教える際の順序、フレーズ・シャドーイングという知覚訓練法を教育現場に提案する。

## 2. 先行研究の概観

### 2.1 可能表現に関する先行研究

#### 2.1.1 可能表現の誤用について

中国語教育の現場では可能表現に関する誤用は多く見られ、また誤用のパターンも様々であるため、習得状況や誤用分析に関する先行研究が多く発表されてきた（e.g., 郭、2001、2014、2017；盧、2006；松田、2015；来他、1993；呉他、2005；吉田他、2018；楊、2012）。本研究は初級・初中級学習者の「能、会、可以」と可能補語の否定形表現の使い分けの難しさに焦点を当て、誤用例を分析し、教習時の改善法を探るものである。下記誤用は、筆者が教えている初級（学習歴：授業は毎回95分間、週4回、計4ヶ月）及び初中級（学習歴：授業は毎回95分間、週4回、計8ヶ月）学習者の作文、会話測定、授

業中の発言、メール連絡などで見られた誤用の例である。まずは、「能、会、可以」の誤用を記す。

1. \* 你会听懂老师说的汉语吗? ⇒ 能
2. \* 因为我的胳膊很疼, 我不会开车。⇒ 不能开车了
3. \* 我今天身体不舒服, 不可以去上课。⇒ 不能~了
4. \* 老师, 我们会不会早点儿下课? ⇒ 能不能 (可不可以)
5. \* 那个汉字, 你会给我写一下吗? ⇒ 能~吗?/可以~吗?

上記誤用文は、結果補語が伴う場合の「~する能力があるかどうか」についての質問文（誤用例 1）や何らかの理由で「~することができなくなった」（誤用例 2、3）場合、状況・情理上許されたうえでの実現可否（誤用例 4）、依頼・お願いをする場合の言い方（誤用例 5）の誤用となる。このような誤用文では、「能」を使うべきところで「会」と「可以」を間違っ使ってしまう傾向が見られる。「会」と「能」の使い分けは外国人学習者にとって習得が難しく、誤用率が最も高いと言われている（張、2008）。以下は、可能補語否定形を使うべきところで助動詞の否定形「不能、不会、不可以」を使ってしまった誤用例である。

6. \* 老师, 我们不能听见你说什么。⇒ 听不见
7. \* 中文发音太难了, 我不会听懂/不可以听懂。⇒ 听不懂
8. \* 我喜欢做蛋糕, 但是我不会做好。⇒ 做不好
9. \* 我的网络不好, 我不会进 Zoom上课。⇒ 进不去/进不到
10. \* 这么多汉字, 我考试的时候不可以写完。⇒ 写不好/写不完

盧（2006）、呉他（2005）、郭（2014）などが指摘したように、日本人学習者の可能補語運用に関する間違いは専ら助動詞の否定形「不能、不会、不可以」との誤用であり、不当に可能補語の否定形式を代用してしまうことである。盧（2006）は、「不会」、「不能」の濫用の割合が非常に高いと指摘している。呉他（2005）は、多くの日本人学習者は「能」、「会」と可能補語の「V（動詞）得 C（結果）」、「V 得了」の習得があまり順調でなく、可能補語の「V 不 C」を使うべきところを「不能」や「不会」あるいは「不可能」と間違えてしまうと述べている。郭（2001）によると、能力と都合による可能の否定はあまり「不能」を使わず、なぜなら「不能」は、「してはいけない」という禁止の意味合いが強いからであるという。また、普通、能力と都合、条件による動作実現不可能は可能補語の否定形を使用する、と述べている。「能」、「会」はいずれもこれから発生することの可能性について推測する意味を持つが、客観的条件に基づく推測や話者の主観的意思により「主観決定」した「可能性」といった推測とは観点が異なる。可能表現の誤用の多くは、可能補語の否定形を使うべきところで助動詞の否定形を使ってしまうものである。

次は「能、会、可以」と可能補語の文法的意味に関する先行研究を概観し、それぞれの重要な文法的意味の焦点を絞り、教授する際の重要なポイントを整理する。

### 2.1.2 能

刘 (1980)、劉他 (1996)、黄 (1995)、讚井 (1996)、大江 (2015) では、「能」の文法的意味は以下のように挙げられている。①主体が物事を行う能力や行う条件を持っている。②客観的条件が揃っていれば動作が実現可能である。③情理上許されることを表し、多くは疑問文や否定文に使用される。④状況から許可される。⑤努力によって、望ましい事態を実現することができる (平叙文において④、⑤の肯定は「可以」を用いることもできる)。⑥あることを上手くできることや動作主があることを行う際、持続時間が長く、できる量が多い。⑦「身体的・精神的な力」による能力 (能力・健康の回復、或いはその能力を失うこと)。

大江 (2015) は、「能」は動作の動的事態・静的事態に基づき、「～することができる」という「可能」の概念を構成する「力」に着目した観点から分析し、動的事態の障害を克服し、積極性を持つと述べている。史 (1994) は、「能」と「会」は主観能力と客観的条件によって使い分けられていると述べ、能力があるかどうかを表す場合は「能」と「会」のどちらも使えるが (例えば (説明用例文は全て著者が作成) 「我能/会射击 (私は射撃ができる)。」)、一方で、「明天上课时要考试, 他会来上课的 (明日、授業中に試験があるので、彼は授業に来るでしょう)。」は、話者の主観的推測を表し、「会」を使うならば文末に必ず「的」を付ける必要があるという。

### 2.1.3 会

「会」の文法的な意味は、大きく分けて2つある。1つ目は、学習や練習を経て習得した初歩的な技術・技能・知識で「～することができる」というものである (e.g., 相原, 1991; 郭, 2001; 勝川, 2011; 黄, 1995; 来他, 1993; 刘, 1980; 鲁, 2004; 朱 1995)。2つ目は、助動詞として派生的に「推量・可能性」を表すものである。

まず前者について、朱 (1995) は、「能」、「可以」は多くの場合、通常達成が難しいと思われることをやり遂げる力があることを表すのに対し、「会」は多くの学習や練習を通じて獲得した技能で遂行できることを指し、「会」は主体の意志や外的条件に依存することなく、習得性や恒常性を持ち、非特定時間的に反復可能な「能力」を持つことを表すと述べている。

また鲁 (2004) は、「会」は、動作主が「上手に～することができる」も表すことができ、往々にして「很、特別、真、最、这么」などの程度副詞を付けて「～する能力が優れている」を示すと述べている。相原 (1991)、来他 (1993) は、「会」は習得した技能の「デキル」を表し、「会」の文法的意味は、決して「技能を理想的にマスターする」ではなく、とりあえず「本能以外の最低レベルの、初歩的なレベルをクリアすればよい」と主張している。例えば、「\* 孩子会哭了, 会睡觉了。」は、本能的なものであり、「習得以前」から「習得以降」への飛躍が見られないため、「会」は用いられないという。

次に後者は、動作の実現可能性に対しての「推量・推測」を表すものであり、実現の可能性を主観的に肯定する文には、文末にしばしば確認の「的」を伴う (来他, 1993)。鲁 (2004) は、「会」は動作主が主観的にある状況が現れる可能性やその状況の存在の必然性を表すと述べ、相原他 (1996) は、「会」は蓋然性を表し、「～のはずだ、に違いない、だろう」を表すと述べている。

史 (1994) は、「会～(的)」は第一人称に使われる際、動作主の主観的決定、つまり、「自分が設定した可能 (原文: 设定的可能)」、「主観決定」した「可能性」であり、第二、第三人称に使われる際は、「推測の可能」であり、話者が動作主の行為の实

現の可能性に対して推測を表すと述べている。例えば、「我会去参加你的毕业典礼的（私はあなたの卒業式に出席するよ。主観的決定の可能）」、「他会去参加你的毕业典礼的（彼はあなたの卒業式に出席するよ。推測の可能）」。また盧（2006）は、未来に発生する事態に対する主観的判断の推測を表す際、「～吧」、「～的」だけでは文は成立せず、「会～吧」、「会～的」を使うことで初めて文が成立すると述べている。すなわち、「会」と文の最後に用いる語気助詞の「吧」、「的」は、推測を表す文において互いに補うものであり、セットで使うべきなのである。

推測の可能を表す「会」の文法的意味の重要なポイントは、以下の2点である。①話者が自らの推測を言い表す。②第二、第三人称に使われる場合において、話者が動作主の行為が実現できるか否かについて推測または質問する相手に推測した結果を尋ねる。

#### 2.1.4 可以

「可以」の文法的意味について、劉他（1996）、荒川（1992）、相原（2000）、柴（2016）は以下のように挙げている。①主体的条件、または客観的条件が揃っていることを表す。②許可・情理上許され、お願い・依頼することを表す。③する価値がある、提案する、お勧めすることを表し、否定意には「不值得」、「没必要」、「不用」を用いる。

郭（2001）は「可以」は、条件や許可により動作が実現できるという意味を表すが、近年南方方言の影響で、状況により動作を実行できることも「可以」で表すことが時々見られると述べている。例えば、「明天我很忙，我不可以去（明日は忙しいので、行けない）。」、「明天我没事儿，我可以去（明日は特に予定がないので、行ける）。」といった言い方は特に若者の間で使われていることが多いという。しかし、このような使い方は「可以」の条件や許可により動作が実現可能だという標準語の文法的意味規定とは異なるため、やはり使わないほうがよいとも述べている。

讚井（1996）は、「可以」は話し手や聞き手の判断としての「許可（～してよい）」、「不許可（～してはいけない）」の意味を表し、「普通語」では、平述文において肯定形の「可以」を使っても否定形の「不可以」を使う習慣はなく、一般的には「不能」を使うという。この点においては、刘（1980）、朱（1995）、郭（2001）なども同じであり、「可以」が「行為主体の能力がある事態を達成できるか否か」を表す一方、「不可以」は「～することは許されない、～するべきではない」という意味を表すため、「可以」の否定文は「不能」を使用するという。下記表 2-1 は、先行研究の「能、会、可以」の文法的意味の総観である。

表 2-1 「能、会（～できる）、可以」が表す「～することができる」（荒川、1992）

	能	可以	会	否定の言い方
能力があってできる	◎	○	×	不能
条件があってできる	○	◎	×	不能
許可されてできる	○	◎	×	不能、不可以
習得してできる	×	×	◎	不会

## 2.2 条件や都合による不可能の場合の「能、会、可以」と可能補語

### 2.2.1 「能、会、可以」の否定形について

先行研究 (e.g., 荒川、1992 ; 相原、2000 ; 刘、1980 ; 盧、2006 ; 杉村、1991 ; 柴、2016)

で取り上げたように、「不能」、「不可以」は文法機能上、「許可しない」、「～してはいけない」という意味を表すため、「能」、「可以」の肯定形と否定形の文法的意味の「～することができない」は相応しくないとされる。盧（2006）は、「不可以」は「不能」よりも不許可の語気をもっと鮮烈で、さらに不満や非難といった責める語気を表現し、相原（2000）は、「不可以」は強く禁止する場合や絶対に許さないという「完全禁止」、「絶滅寸前」、「譲歩の余地なし」という場合に使われ、軽い禁止であれば、「不行」を使うと指摘している。このように、「不可以」は「完全禁止・絶対禁止」という意味と語気が強いいため、自分自身の「絶対に～してはいけない」や反語文以外では、「我不能～」を使うよう指導すべきだと提案する。

### 2.2.2 「会」の否定形について

「会」の1つ目の文法的意味として、魯（2004）は、動作主が「～する能力が高い」を表す一方、「不会」は「～する能力がない」を表すと述べている。また、「会」の推測意の「～するだろう、～するはずだ」という可能性を示す文法的意味の否定形は副詞連語の「不会（～することがないだろう、～するはずがないだろう）」を使うという。例えば、「我想他不会不懂（彼が理解できないはずがないだろうと思う）」が挙げられる。また、郭（2014）は、能力による可能を表す場合、肯定文では「能+V」を使い、否定文では「不会+V」ではなく可能補語の否定形を使うべきだと述べている。つまり、条件や都合によって動作の実施が不可能な場合には、積極的に可能補語の否定形を用いるべきだと主張している。郭（2014）は、可能補語で一番使われているのは、条件と都合による動作・行為の実現が不可能を表すときだと言っても過言ではないと述べ、条件と都合によって動作の実現が制限される際に、可能補語の否定形を使うように、教育現場に提案している。

### 2.2.3 可能表現の助動詞と可能補語の入れ替えについて

盧（2006）は、日本人中国語学習者の可能補語の応用において非常に多く、最も間違えやすいのは、客観的条件の制限により動作の実現が不可能な場合、すなわち、可能補語の否定形を使うべきところで助動詞の否定形の「不会」、「不能」を使ってしまうという間違いであると指摘している。「不能」は主観的能力及び動作を実現するため、主観的能力に基づいた実現条件に対する否定であるが、可能補語の否定形は、客観的条件の制限により可能性を否定する場合に使う文法である。

### 2.2.4 可能補語の文法的意味について

刘（1980）、李（2012）は、可能補語は主観的または客観的制限を受け、動作主の意図が思い通りに実現されない状況をいうと述べている。つまり、「非不愿也、实不能也（やりたくないのではなく、本当にできないのである）」という状況を伝えるために用いる文法である。玄（2000）は、可能補語は、自分の意志というよりもある客観的な条件を受けて、仮に自分にその意志があっても動作・行為が実現できないという意味を表すのに使われると述べている。

刘（1980）は、可能補語の肯定形と否定形の使用状況には大きな差があると述べ、荒川（1992）は、可能補語の9割は否定形であると述べている。刘（1980）は、それは主観的・客観的条件の制限を受けず動作が実現できる場合（肯定形）は、「能/可以+V+結果

方向」という表現があるからだと述べている。しかし、主観的・客観的条件の制限を受け、動作が実現できない場合において「不能+V+結果/方向」を使うのはごく稀であり、この場合は可能補語の否定形の「V+不+結果/方向」を使うのが一般的であるという。盧(2006)は、客観的制限を受け、動作を仮に実施してもその結果または動作の方向性を思うように得られない場合の表現は、可能補語を使うしかないと主張している。日本人学習者が中国語の可能表現を学習する際の最も顕著な間違いは、助動詞の否定形を用いて、可能補語の否定形を代替するものであるとも述べている。従って、可能補語は、動作の結果・状態が実現可能かどうかを示す場合や実施したいことを能力や制限によって実現できないときに唯一使える表現であるとも言えよう。

以上で述べてきたように、可能表現の習得は、第二言語としての中国語学習者にとって大変難しく、混乱しやすい文法項目であるため、誤用分析の先行研究が数多く発表されてきた。しかし、可能表現の習得に関する練習法について、従来通りの「選択問題」、「正誤判断」、「翻訳問題」といった基本的な文法練習法以外に、フレーズを正しく産出する訓練法に関しては、管見の限り少ない。そこで本研究では、中国語可能表現の文法学習において、知覚訓練法であるシャドーイングを用いて、可能表現のフレーズを教員の声と同時に、しかも瞬時にインプット・アウトプットする方法で繰り返し練習することにより、記憶保持の効果やこの文法項目の学習効果を検証した。

### 2.3 知覚訓練法としてのシャドーイング効果の理論的根拠

言語運用では、言語情報の処理と貯蔵とが心の中で同時に行われて初めてコミュニケーションが成立する。作動記憶 (working memory) は、言語運用の際の処理と貯蔵 (保持) の同時並行作業を支えるシステムである。認知心理学において、Baddeley (2000) の作動記憶モデルが代表的なモデルである。このモデルでは、音韻ループ (phonological loop)、視・空間スケッチパッド (visuo-spatial sketch pad)、中央制御部 (central executive) の3つのシステムが仮定されている。音韻ループは、音声化あるいは文字化された言語情報の一時的な貯蔵のためのサブシステムであり、時間に基づく容量の限界がある。視・空間スケッチパッドは、視覚的・空間的情報の一時的な貯蔵に携わるサブシステムである。音韻ループと視・空間スケッチパッドはそれぞれ独立して機能し、中央制御部と呼ばれるメインシステムによって制御される。

中央制御部は、注意制御システム (attentional control system) であり、処理資源 (processing resources) としての注意量を適切に配分し、言語の理解・産出といった認知活動における処理を行う。中央制御部が2つのサブシステムを制御し言語活動を行う際に、一度に配分できる処理資源には限界があるとされている (松見、2006)。

言語学習とその内容の記憶を扱う際は、処理資源の限界を緩め、絶えず認知負荷を軽くする必要があると考えられている (門田、2012)。つまり、認知心理学の「容量の限界」に対応するためには「自動化<sup>1</sup> (想起意識を伴わない記憶、すなわち潜在記憶 implicit memory、手続き記憶である。手続き記憶とは、自然に習得・蓄積され、自動化された言語知識を必要な時に素早く検索できる記憶である。)」の度合いを高めていく必要がある。

---

<sup>1</sup> 門田修 (2007) によれば、自動化とは、①あまり努力や注意を向けなくても稼働の実行ができる状態、②課題の実行中に、他の干渉するような実態が生じても殆ど影響を受けない状態である。

また、潜在記憶の相反に、想起意識を伴う記憶である顕在記憶（explicit memory、意味記憶）がある。顕在記憶（意味記憶）は、過去に学習した経験をエピソード体験として思い出す記憶である。

第二言語学習は、獲得された知識を想起する意識が働かなくても潜在記憶（手続き記憶）に支えられると言われており、言語学習が成立したとき、その知識の内容に対し時間が経っても、刺激による反応・処理が行われるという。なお、顕在記憶として、獲得された知識が潜在記憶の貯蔵対象に移行するには、訓練が必要だと考えられている（松見、2006）。

小柳・迫田（2006）は、学習内容を「わかる」から「できる」に結びつけるには「自動化」が重要であり、言語運用能力の育成には、言語知識があるだけでなく、それらを繰り返して使う練習が必要であり、それによって自動化の程度を高められるとしている。門田（2012）は、無意識的な潜在記憶（自動化）を形成しようとする学習には多くの時間がかかり、何度も繰り返す反復学習（repetition priming）が必要だが、一旦潜在記憶が形成されるとそれが忘却されることはないと述べている。

Atkinson& Shiffrin（1971）は、情報の短期記憶から長期記憶への転送について、情報の反復であるリハーサルが多く行われると、短期記憶にある程度情報が長く保持され、長期記憶への転送確率も高くなると述べ、 Craik & Watkins（1973）は、それには情報を長期記憶へ転送する役割を担う精緻化したリハーサル（elaborative rehearsal）が必要であると述べている。つまり、入力した情報をイメージ・文章化などして意味的情報と関連付け、心的活動を繰り返すことで、情報の処理水準が高まり、豊かな記憶痕跡が形成され、情報の長期記憶への転送確率が高くなるという。

門田（2007）は、第二言語学習で考慮すべき2つの原則として、1つは記憶に残りやすく、長期記憶から素早く検索できる処理水準であること、もう1つは、長期記憶に転移できる適切処理であることを挙げている。新出単語や文型パターンなどの言語情報を目で追っているだけでは長期記憶に転送される効果は殆どないと考えられ、目で見る言語情報を音韻符号化（発音）して、ワーキングメモリーの音韻ループ内で内的リハーサルを行うことが長期記憶に転送されるためには必須となる。

松見（2006）は、音韻ループは、音声化あるいは文字化された言語情報の一時的な貯蔵のためのサブシステムであり、「心の中の耳（音韻キャッシュ）」と「心の中の発声（音韻リハーサル）」という2つの構成要素をもつと考えられていると述べている。情報を短期記憶から長期記憶へ転送する役割を持つリハーサルは精緻化リハーサルと呼ばれ、目で見ただけの文字情報（言語情報）をイメージ化したり、意味処理と音韻情報を関連づけて反復したりすることにより、言語の記憶痕跡が豊かになり、長期記憶に転送されやすく、内在化されやすいという。

第一言語・第二言語を問わず、言語の処理においては、音韻表象（phonological representation）、意味概念表象（conceptual representation）、文字表象（orthographic representation）などの各種の心的表象（mental representation）が形成され、それらの表象間を行き来しながら処理が進行していくと考えられている。第一言語話者は手続き記憶（潜在記憶）が機能しているのに対し、第二言語話者は意味記憶（顕在記憶）にとどまるのが一般的である。第二言語学習者は、インプットした情報に関連するエピソード記憶として言語知識を蓄積し、それを脱文脈化することで意味記憶として保存し、時間をかけて徐々に手続き記憶（潜在記憶）へと変換していくと考えられている。

では、本研究ではなぜ知覚訓練法であるシャドーイングを用いるのか。シャドーイング (shadowing) とは、文字通り聞こえてくる音声に「影」のようについて繰り返すことである (胡, 2009)。門田 (2007)、玉井 (2005) は、シャドーイングは耳から聞こえてくる音声に遅れないように、できるだけ即座に声をして繰り返しながらついて行く練習法であると述べている。この練習法では、学習者が注意力を高めながらネイティブの発音に注意を払い、聞こえてくる発音や発話に対しほぼ同時に口頭再生することで、ネイティブの発音とほぼ同じような正しいアクセントで音声リハーサルすることになる。また、門田 (2007、2012) は、知覚訓練法のシャドーイングは音声知覚を自動化するための練習法であり、音読と同様に語彙・文法規則を内在化させるための練習法でもあり、また、手続き記憶 (潜在記憶) を形成させるための訓練法であると述べている。

手続き記憶 (潜在記憶) とは、本来、繰り返しによる学習を運動の実現という側面から捉えた概念である。すなわち、一定の運動パターンを繰り返すことで、その分だけより滑らかかつ迅速に動作を実現できるようになるというものである。第二言語における語彙、構文、句型パターンなどの言語知識も学習初期には特定の文脈に依存した、いわば「シーンに埋め込まれた知識」として保持される。これらは繰り返し練習することで脱文脈化され、手続き記憶 (潜在記憶) として蓄積されるようになり、必要な場面に応じて、いつでも検索可能な言語知識・言語技能として活用できるようになる。つまり、シャドーイング効果が及ぼす主なところは、一定の運動パターンを繰り返すリハーサルによる長期記憶への転送である (図 2-1 を参照)。

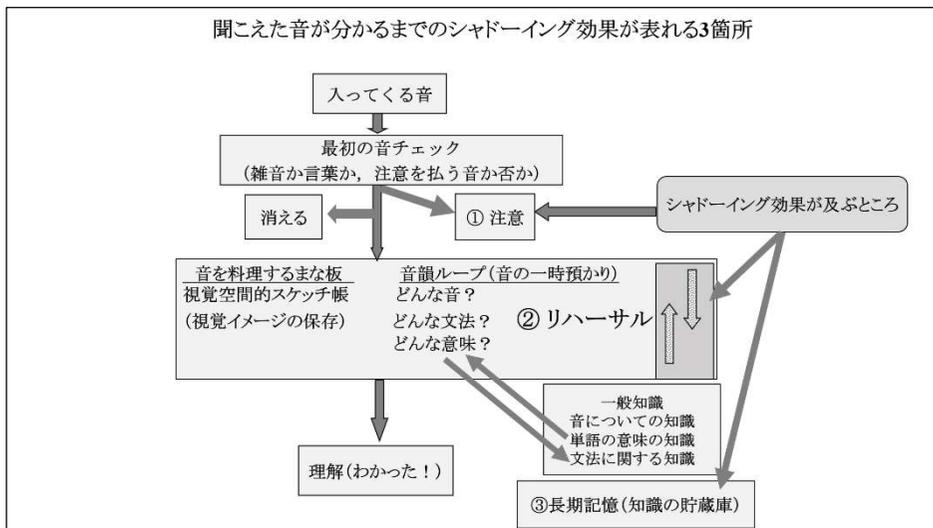


図 2-1 シャドーイング効果が表れる 3 カ所 (玉井 2005 を参照し、本稿筆者が作成)

門田 (2007) は、実験を繰り返した結果に基づき、シャドーイングには 2 つの効果があると述べている。1 つ目は、音声知覚 (音韻表象の形成) の自動化である。2 つ目は、第二言語における内的リハーサルの効率化により発話速度の向上が期待でき、長期記憶への転送に必要な音韻ループの内語反復が効率化されることから、語彙や構文などの長期記憶への情報伝送が促進され、言語情報の記憶、新たな学習項目の内在化が達成できることである。シャドーイングは、第二言語学習の実践と関連し、深い処理水準を可能

にするインプットの提供及び長期記憶への転移に適した処理という考え方を前提に、学習者が実際に音韻処理や意味処理を行い、その学習に注意を向け、その運動パターンを記憶するのに役立つとされている。また、シャドーイングは、精緻化された外的および内的リハーサルを可能にし、記憶への転送をさらに促進すると考えられている。

門田（2007）は、新たな学習項目を長期記憶に転送する際に重要なのは顕在記憶（意味記憶）として内在化することではなく、それを潜在記憶（手続き記憶）として意識しなくてもすぐに取り出せるように内在化することである。また、人間が言葉を学習するシステム（言語獲得装置）にシャドーイングが非常によく合致していると述べている。シャドーイングによって、聞いた発音・イントネーション・内容・文法情報などをポーズを置かず音声の直後に繰り返すことで、正しい発音の定着、音声知覚の自動化、聞き取り能力の向上、語彙・語彙チャンク・文法情報の効率的な記憶が促され、第二言語の習得に役立つとされている。

通訳訓練法として用いられるシャドーイングは、通常、コンテンツ・シャドーイング（プロソディー・シャドーイング）を用いて訓練するのが一般的であるが、本研究では、中国語可能表現の文法構造の習得及び音声とともに潜在記憶（手続き記憶）として定着させることを目的として、上下の文脈に意味的関係がない「能、会、可以」及び可能補語という4つの文法項目について、それぞれ10文のフレーズを作成し、シャドーイングに用いた。この練習方法を「連続フレーズ・シャドーイング」と称する。

本研究に用いた練習用フレーズの特徴は、学習者の生活や学習場面でよく使われ、汎用性の高い文を用いている点にある。同じ文法項目のフレーズを繰り返しシャドーイングすることにより、一定の運動パターンを通じて、音声知覚の自動化や文法情報の定着が促進、文型パターンが効率よく記憶され、長期記憶への迅速な移行が可能になるという利点が考えられる。

本研究における連続フレーズ・シャドーイングの実施方法としては、教員の発音が聞こえたら即座に発音するよう指示した。このような条件下では、インプットとアウトプット処理の同期性が求められ、作動記憶を構成する中央制御部の注意制御システムにおける注意配分量（認知負荷）が大きくなる。そのため、参加者は常に音声インプットに注意を払い続ける必要がある。インプットとアウトプットを同時に行う際には時間的余裕がないため、できるだけ速く意味処理も実行する必要があり、脳の音声知覚に関わる認知負荷を軽減したいという方向に学習が進むことになる。これが「音声知覚の自動化」を生み出す前提条件である。

神経言語学と認知言語学の知見において、酒井（2006）は、人間の左脳には言語活動に深く関わる2つの重要な領域があるという。1つは言葉の音声認識、内語反復、単語の意味記憶といった言葉の理解・処理に特化した領域のウェルニッケ野で、もう1つは言語の音韻産出、語彙活用、語形変化などの言語産出に深く関わるブローカ野である。Hiramatsu（2000）は、神経言語学と認知言語学の観点からシャドーイングの脳内での活動領域について言及し、シャドーイングは「聞く」と「話す」を同時に行うため、ウェルニッケ野とブローカ野の2つの言語領域が同時に活性化され、意味処理と発話が一体化することで文に対する理解と産出の両方が促進され、脳を全体的に活性化する効果があると発表した。

古川（2011）は、「シャドーイングメソッドを使って学ぶ中国語」をテーマに会話形式で「能、会、可以」を取り入れたフレーズ・シャドーイングの書籍教材を出版し、多く

の学習者にとって役立つと考える。長谷川 (2005) は、『シャドーイングで学ぶ中国語文法』の可能補語部分でフレーズを紹介し、方向補語やその他の文法事項の中、可能表現のフレーズを数文取り上げて練習させた。吉田他 (2018) は、「理解可能なインプット」を教習に用いるべきだと主張し、可能表現をいかに教科書に記述し、導入するかを検討すべきだと提案した。日本の中国語教育の現場において、中国語初中級の発音練習やスピーキング、リスニング力向上にシャドーイングを導入した実践報告はあるが、中国語文法学習に活かした実践報告は、管見の限りまだ見つかっていない。

本研究では、フレーズ・シャドーイング練習法を中国語文法学習の難関の一つである可能表現の教習に活かし、この練習法が可能表現の習得にいかなる効果を持たせるかを検討した。連続フレーズ・シャドーイング用の練習材料は、著者が務める大学で使用している教材の学習内容や単語レベルに合わせたものに基づいて作成した（付録資料を参照されたい。紙面の限りがあるため、各5文を取り上げた）。次節では、具体的な実験手続きや練習方法を示し、また、事前測定、事後測定の測定方法とその結果を分析する。

### 3. シャドーイング練習法を用いた実験

#### 3.1 実験の具体的内容

【実験参加者】本研究の実験参加者は、筆者が勤務する日本の大学で選択科目として中国語を10ヶ月（14名）及び14ヶ月（10名）学習した初中級学習者計24名（アジアなどの国・地域からの留学生も含む）であった。学習歴については、1学期は4ヶ月、1回95分の授業を週4回、10ヶ月と14ヶ月の学習者の合計学習時間はそれぞれ約200時間と280時間（試験などを除く）であった。どちらの参加者も可能表現の「能、会、可以」を学習済みで、学習時間が14ヶ月の参加者は可能補語も学習済みであった。

学習歴が10か月の参加者は可能補語をまだ学習していなかったため、シャドーイングの前に、可能補語の構造について数分間で簡単に紹介した。紹介内容は、「可能補語は結果補語や方向補語によって構成され、動作の結果や状態が実現・達成できるかどうかを表すものであり、肯定形・否定形・疑問形・反復疑問文型がある」といった文法構造や文法的意義の簡単な説明にとどめた。例として、「吃得了、写得完、听得懂／听不懂、参加不了、做不完」などを挙げた。

【実験材料】シャドーイングの練習効果を測定するために、練習の実施に際し、事前、事後測定を行った。測定では2項目を用いた。1. 中国語の文の正誤を判断する問題15問（学習歴10ヶ月、14ヶ月の問題は異なる）、2. 日本語の文を中国語に訳す問題10問（学習歴10ヶ月、14ヶ月の問題は同じ）。2項目の問題の誤答個数の変化を分析するために、事前、事後は同じ問題を用いた（付録資料を参照）。

【実験手続き】連続フレーズ・シャドーイング練習の効果を測定するために、実験は、以下の3セッションで構成した（図3-1を参照）。セッション1では、連続フレーズ・シャドーイングの前にGoogleフォームにアップした15問の中国語の文の正誤を判断する問題に答えた後、10問の日本語の文を中国語に訳す問題に答えるようにした。セッション2では、連続フレーズ・シャドーイング練習用「能、会、可以」及び可能補語の4つの文法項目のフレーズそれぞれ10文を用いて、2週間の授業で連続フレーズ・シャドーイングを4回実施した。授業進度や教習内容の関係で練習は隔日、即ち週2回、毎回約15分間実施した。

連続フレーズ・シャドーイングに用いたフレーズは、落ち着いたスピードで読み上げ

る場合、短い文は4秒、長い文でも6秒ほどで読み上げられた（付録資料を参考）。一回の練習で40個のフレーズを4つの文法項目別で10文ずつに分け、10文の全センテンスを途切れることなく一気に読み上げ、シャドーイングさせた。シャドーイングする際に、視覚情報により記憶痕跡も深められるよう、資料を見ながらシャドーイングをさせた。シャドーイングの際、教員の声が聞こえたら即座に教員の声と同時に同じフレーズを言うように指導し、実験参加者は教員と同じほぼタイミングでフレーズを言い終えた。フレーズに事前に録音した音声資料を使わず、教員が音読した音声と同時にシャドーイングさせた理由としては、シャドーイングは高い集中力を要するため、教員の生の声の抑揚と言語情報の処理方法を感じ取ってほしいからである。

10文の後には30秒ほどの休息时间を入れてから次の10文に進めることにした。1回の練習で全40個のフレーズをシャドーイング練習し、2週間の間、同じ練習を4回繰り返す、それぞれの文を計4回、可能表現の文をトータル160回シャドーイングした。練習開始から2週間後、セッション3として、事後測定を事前測定と同じ手順で行った。事前測定実施後、測定用の問題については模範解答開示や問題の説明を一切せず、連続フレーズ・シャドーイング練習材料にも用いなかった。

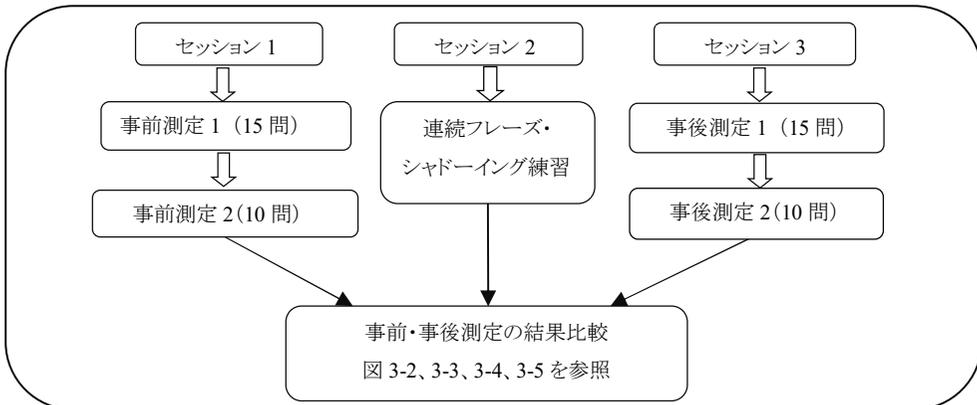


図 3-1 連続フレーズ・シャドーイング練習と効果測定のための3セッション

### 3.2 学習歴が10ヶ月の参加者の結果

2週間計4回練習を行った後、練習の結果を図るために、セッション3の事後測定を行った。事後測定1項目の正誤判断問題の結果から、下記3問は事前測定と比べ、15問中11問の正解率が高くなったことがわかった。また、特に下記3項目の正解率の変化が大きいことが窺えた（事後測定の正解率は、図3-2を参照）。

- \* 1-6 我可以喝酒，但我今天开车，我不可以喝酒。
- \* 1-8 那位老人的身体好了，她会跑步锻炼身体了。
- 1-11 你说林娜明天会不会早点儿来上课？

1-6については、「可以」の「主体的条件・客観的条件が揃っている、許可・情理上の動作・行為の実現が許される」という文法的意味に対する理解が深まり、「我会喝酒」+

理由（情理上許されないことや自分のことを滅多に絶対禁止しないことから）⇒「不能喝酒」を使うのが正しいと判断できる参加者が増えたと思われる。1-8については、「能」の「身体的・精神的な力」による能力（能力・健康の回復を表す意）に対して、理解や意味処理した上で記憶が深まったと思われる。1-11については、推測の「会」が第二、第三人称に使われる際、話者の動作主による行為の実現可能性に対する推測の意となることへの理解が深まり、話者の立場から、この文のイメージが練習によって明確化され、事後測定の結果の改善に繋がったと考える。

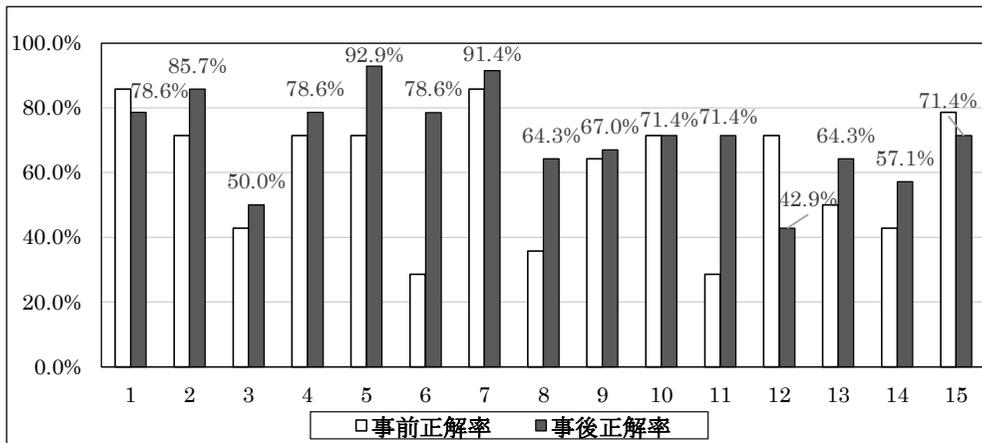


図 3-2 中国語の文の正誤を判断する問題 15 問の正解率（学習歴 10 ヶ月）

しかし、「\*1-12 我明天要去东京，下午开会，我不会回来呀。」の事後測定の正解率は事前測定より低くなった。考えられる理由として、前述したように、参加者は、「会」が第一人称に使われる際には、動作主が「主観決定」した「可能性」を表すことを理解し、「東京に出張に行ったので、午後の会議には当然出られない」と考え、第一人称における「会」の「主観決定」の意味と誤解したと考えられる。学習歴 10 ヶ月の参加者は、可能補語自体が未学習のため、条件と都合によって動作の実現が制限される場合、可能補語の否定形を避けずに使うことにまだ不慣れであると考えられる。

第 2 項目（10 問）の事前・事後測定の正解率の変化に関しては、図 3-3 を参照されたい。本研究で検討している可能表現のいずれかを正しく使用できなかった場合や使用しなかった場合は、「正解」と見なさないことにしている。事後測定の正解数の増加が比較的に大きいのは下記 5 文であった。特に 2-9、2-10 では事前測定で見られなかった可能補語の否定形を使った参加者も数名現れた。可能補語を未学習であった上記の学習者において、シャドーイングの前に可能補語の構造と文法的意味を簡単に紹介しただけで、習得が難しいと言われる可能表現を身につけ、事後測定の成績を明確に向上させるとは考えにくい。よって、事後測定の成績の改善は、シャドーイングの効果によるものと考えられる。

- 2-1 先生の質問を聞いて、理解できるかどうか聞くとき  
你能听懂老师问的问题吗/你能不能听懂老师问的问题？

- 2-3 昨日の宿題が理解でき、やることができたかどうか知人に聞くとき  
你能理解，也会做昨天的作业吗？
- 2-8 知人に、彼は私の秘密を他の人に言うかどうか聞くとき  
你觉得他会把我的秘密告诉别人吗？
- 2-9 二歳の子供に、自分で服を着られるようになったと知ってはいるが、  
この服はまだ自分で着られないので私が手伝ってあげるよ、と伝えるとき  
我知道你会自己穿衣服了，但这件衣服你还不会自己穿/你自己还穿不了，  
我来帮你。
- 2-10 車の運転はできるが、腕を怪我してしまい、今は車の運転ができないと  
伝えるとき  
我会开车，但我的胳膊受伤了，现在我不能开车了/开不了车了。

事後測定対事前測定の正解数の差を参加者内要因で分散分析した結果、第1項目の正誤判断問題は、 $F(1,13) = 3.61 P = 0.0799+$ で有意傾向が表れ、第2項目の日本語の文を中国語に訳す問題は、 $F(1,13) = 6.99 P = 0.0267^*$ 有意であったことから、フレーズ・シャドーイング後の正解数の変化が有意傾向及び有意であったことが示された。特に、第2項目の「日本語の文を中国語に訳す」問題では、正解数が増え、可能表現を正しく産出できるようになったことから、練習の効果が明らかに現れていると考えられる。

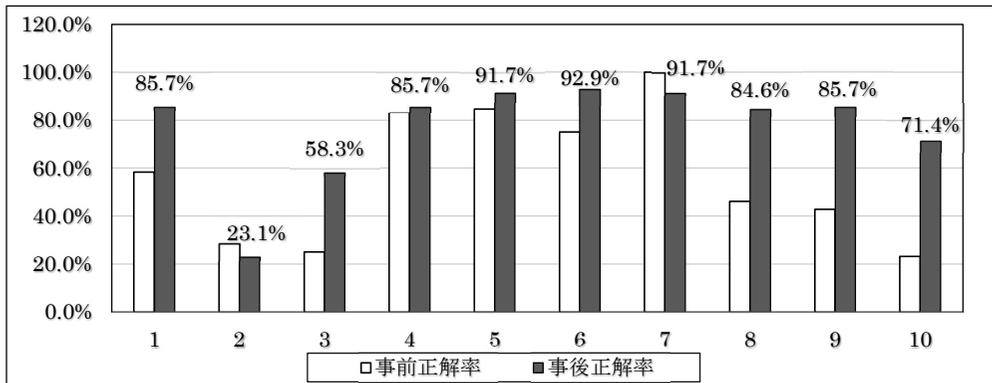


図 3-3 日本語の文を中国語に訳す問題 10 問の正解率 (学習歴 10 ヶ月)

以上で述べたように可能表現の教習にフレーズ・シャドーイングを用いて中国語の可能表現の習得に促進効果があることを検証できた。客観的条件の制限により可能性の否定や条件と都合によって動作の実現が制限される際、可能補語を使う割合が非常に高いことから、推測の「会」を教えた後、できるだけ早い段階で可能補語を教え、それに合わせて連続フレーズ・シャドーイングも行うことを提案したい。

### 3.3 学習歴が14ヶ月の参加者の結果

2週間計4回練習を行った後、練習の結果を図るために、セッション3の事後測定を行った。事後測定1項目の正誤判断問題の結果からは、事前測定に比べ、15問中10問の正解率が上がったことがわかった。特に下記4文の正解率の伸びが大きいことが窺える（図3-4を参照）。

- 1-1 你的手机会不会忘在那家餐厅里了？
- \*1-5 我的网络不好，我今天不会去上课了。
- \*1-7 我明天有事，我不可以去参加大学的种树活动了。
- 1-14 我们会在学完中级中文以后学习商务中文。

下記1-8については、「能」の「身体的・精神的な力」による能力（能力・健康の回復を表す意）に対して、理解や意味処理した上で記憶が深まったと思われる。1-11については、推測の「会」が第二、第三人称に使われる際、話者の動作主による行為の実現可能性に対する推測の意となることへの理解が深まり、話者の立場から、この文のイメージが練習によって明確化され、事後測定の結果の改善に繋がったと考えられる。

- \* 1-8 那位老人的身体好了，她会跑步锻炼身体了。
- 1-11 你说林娜明天会不会早点儿来上课？

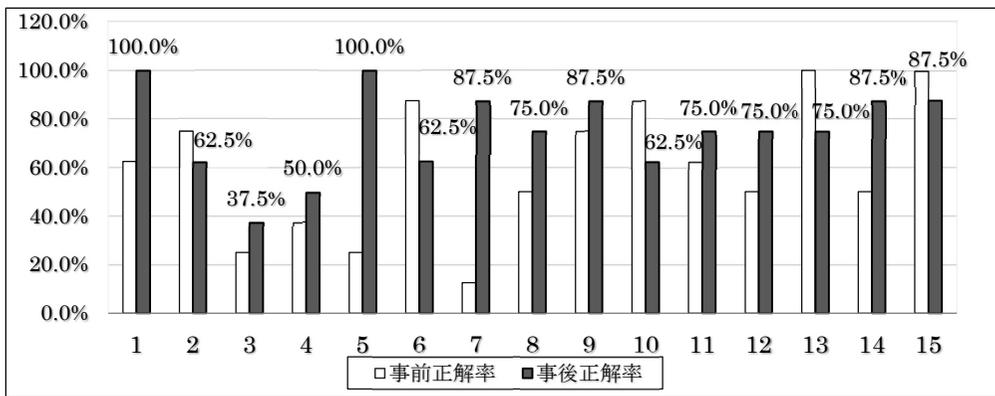


図 3-4 中国語の文の正誤を判断する問題の正解率（学習歴14ヶ月）

事後測定の結果からは、推測の「会」の文法的意味への理解が深まり、また、客観的条件の制限により可能性の否定や条件と都合によって動作の実現が制限される場合は、可能補語の否定形を使うか、あるいは「不能～了」を使うことに対する理解が深まったと思われる。

しかし、下記3文の事後測定の結果は事前測定より下がったことがわかった。

- \*1-6 我可以喝酒，但我今天开车，我不可以喝酒。
- \*1-10 锻炼身体能对我们的身体好，对吗？
- \*1-13 你不可以告诉他你对这个问题的看法吗？

その原因を下記のように分析する。1-6 は、学習歴が 10 ヶ月の参加者の正解率は上がった一方、学習歴が 14 ヶ月の学習者の事後の正解率は下がった。誤答の原因として、「我会喝酒」+理由（情理上許されない・自分のことを減多に絶対禁止しない）⇒「不能喝酒」を使うべきであることに辿りつかず、文の後半の「我今天开车，我不可以喝酒」に注目し、車を運転するのならば、絶対にお酒を飲んではいけないと、自分を厳しく制限することに拘り、前半の文（「我可以喝酒」）の間違いを判断できなかったと思われる。

1-10 は、参加者は「能」の行為が一定程度に「達し」、障害を「克服し」、努力によって望ましい事態を実現させるという意味を重視するあまり、「もし～すれば～ができだろう」という、「能」より語気が弱い推測の可能性を表す「会」をイメージできず、短慮から「能」が正しいと判断してしまったと思われる。1-13 の「\*你不可以告诉他你对这个问题的看法吗?」については、「可以」が許可・情理上許されるという意味であれば、第二人称の疑問文・否定疑問文に使われるときに、反語文の意味で用いられることが多い。しかし、1-13 の文面の内容からは、「你不能～吗?」を使うのが適切だと考えられる。今後、上記結果を受けて、「你不可以～吗?」は反語文によく使われることを強調し、多めにフレーズ・シャドーイングすることを提案する。また、1-3 の正解率は事前・事後共に低かったことから、推測を表す「会」の二重否定「不会不～」は「絶対に～をする」という意味になるが、二重否定文の意味理解そのものが困難であったと考えられ、今後、練習の強化が必要だと考える。

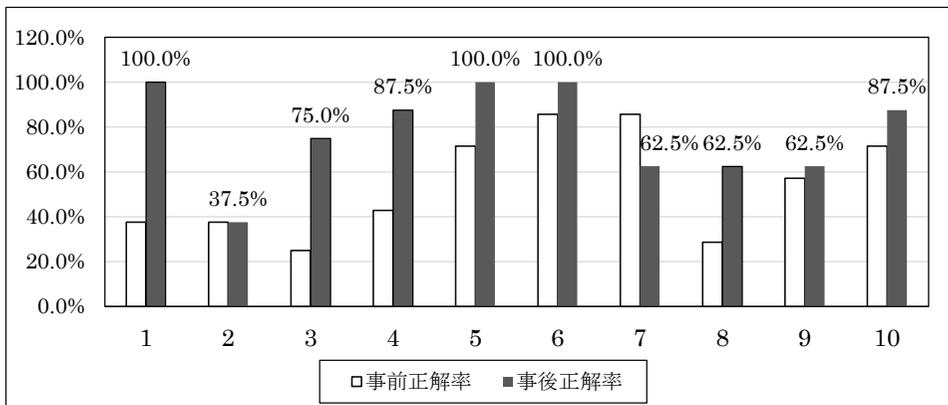


図 3-5 日本語の文を中国語に訳す問題 10 問の正解率（学習歴 14 ヶ月）

第 2 項目（10 問）の事前・事後測定の正解率の変化については、図 3-5 を参照されたい。「正解」と見なす条件は学習歴 10 ヶ月の場合と同じである。事後測定の正解数の増加が比較的に大きかったのは下記 5 文であった。特に、2-1 では事前測定で見られた「会不会」、「可以不可以」の誤用、2-3 では「可以」、「能」の誤用が減少したことがわかった。2-9、2-10 では事前測定に比べ可能補語の否定形の使用が増えたこともわかった。また、参加者の事後測定の結果を見ると、能力の有無を表す「能」を用いる文において、推測の「会」や条件が揃っている際に実現可能であることを表す「可以」との間違いが少なくなったことがわかった。

- 2-1 先生の質問を聞いて、理解できるかどうか聞くとき  
你能听懂老师问的问题吗/你能不能听懂老师问的问题?
- 2-3 昨日の宿題が理解でき、やることができたかどうか知人に聞くとき  
你能理解，也会做昨天的作业吗?
- 2-4 あなたの秘密を他の人には言わないよ、と知人に伝え安心させたいとき  
我不会把你的秘密告诉别人（的）。
- 2-7 なぜまだケーキを食べてはいけないのか聞くとき  
现在为什么还不能/不可以开始吃蛋糕?
- 2-8 知人に彼は私の秘密を他の人に言うかどうか聞くとき  
你说（你觉得）他会把我的秘密告诉别人吗?

学習歴 14 ヶ月の学習者の練習後の事後測定対事前測定の正解数の差を参加者内要因で分散分析した結果、第 1 項目の正誤判断問題は、 $F(1,9) = 3.71 P = 0.0748+$ で有意傾向が示された。第 2 項目の日本語の文を中国語に訳す問題は、 $F(1,9) = 3.20 P = 0.0951+$ 有意傾向であった。この結果から、連続フレーズ・シャドーイングが中国語における可能表現の文法学習に有効であることが確認された。学習歴 14 ヶ月の学習者も前述の第 2 項目の問題での正解数が増え、可能表現の文を正しく産出できるようになっていたため、練習の効果は大きいと考えられる。

#### 4. まとめと教育現場への提案

本研究では、中国語の可能表現における誤用の改善を目的として、知覚訓練法の一つであるシャドーイングを用い、「能、会、可以」および可能補語を含む 40 のフレーズを 2 週間にわたり各文 4 回ずつ計 160 回シャドーイング訓練を実施した。その結果、学習歴 10 ヶ月および 14 ヶ月の学習者のいずれにおいても、事後測定では多くの測定項目において誤用数が事前測定より減少し、明らかな改善が見られた。また、分散分析の結果からも、正解数の変化に有意差あるいは有意傾向が認められた。さらに、練習前には誤用を「自信を持って」発話していた学習者も、練習後には可能表現の使用時に多少の戸惑いを見せつつ、最終的には正しい文を産出できるようになり、その成果は授業内の発表や会話テストでも確認された。

「能、会、可以」などの可能補語の誤用は、第二言語を産出する際、突発的な発言において現れることが多い。したがって、実際の運用では、状況に応じて素早く、正確に産出できることが求められる。実用に耐えうるレベルに到達するには、類似した出来事（第二言語の構文）を平均 3~4 回繰り返し、エピソード記憶から脱文脈化された意味記憶への転換が必要であると言われている（門田、2012）。第二言語の語句を素早く検索するには、相応の認知資源と時間を要する。認知資源を節約し、反応時間の短縮や音声知覚の自動化、意味処理の効率化を図るには、反復処理が有効である。

図 4-1 のように、フレーズ・シャドーイングで素早く繰り返し練習した可能表現の文型パターンは、外的・内的精緻化リハーサルが行われ、音韻・意味・文型構造が繰り返し処理される。可能表現の音韻・意味・文型パターンは音韻ループにより音韻コード化され、記憶痕跡が深められたと考えられる。潜在記憶（手続き記憶）として蓄えられた音韻や文型パターンは必要なときに瞬時に検索・取り出すことが可能となる。つまり、

シャドーイングは、音声知覚の自動化と意味処理の効果化を果たせると考えられる（図4-1を参考）。

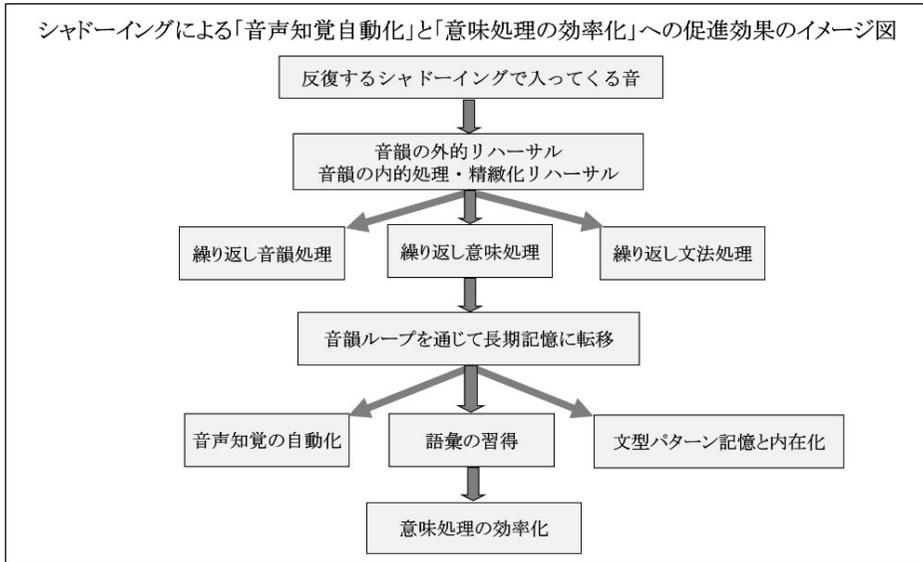


図4-1 シャドーイングによる「音声知覚自動化」と「意味処理の効率化」への促進効果のイメージ図（本稿著者が作成）

連続フレーズ・シャドーイングは、音声知覚の自動化を生み出す一つ的手段となると同時に、文の意味処理の効率を高めることができた。加えて、文法知識の記憶も促進されたことも本研究の事後測定の結果から検証され、作文やその他の明示的な可能表現の練習を行わない状態での事後測定において、多くの誤用が改善されたことが確認された。可能表現の指導においては、文法項目の誤用を早期に減らすことが重要である。その上で、当該文法の定着や正確な運用・産出に繋げるためにも、フレーズ・シャドーイングの導入は有効であると考え、今後の中国語教育において、以下のように提言したい。

具体的な提案は以下の通りである。

一. 可能表現の教授の順序、シャドーイングの導入の時期など

1. 教学の順序についての提案

まずは、基礎的能力の習得を表す「会」、次に能力・条件・許可を表す「能」、「可以」、そして、推測を表す「会～（的）」、「不会不～（的）」の順で教えるとともに、各項目の否定形も併せて教習する。さらに、可能補語、特にその否定形の用法については、推測の「会」の教習と併せてできるだけ早い段階で導入することが望ましい。また、「不能～（了）」「不可以～」の指導に加えて、結果補語・方向補語の否定形「没能+結果補語/方向補語」や「不会V～（的）」の文法的意味と比較しながらの教習を提案する。

2. 導入する時期について

「能、会、可以」の各文法項目を教える段階で、既習の文法・語彙を活用し、叙述文、否定文、疑問文の練習に用いることを提案する。また、これら3項目を学び終えた後、初級学習の最終段階で再度包括的に練習することも有効である。さらに、可能補語の

練習を「能、会、可以」のフレーズ・シャドーイング後に実施し、初中級レベルの学習段階で取り入れることを勧めたい。その際、レベルアップした既習語彙と組み合わせ、「能、会、可以」も含めて再練習することが望ましい。

3. フレーズ・シャドーイング文の選定について

学習者の大学生活や日常生活に密接に関連した場面（例：大学生活、サークル活動、アルバイト、旅行など）で使えるフレーズを使用するのが望ましい。

4. フレーズの長さについて

フレーズ・シャドーイングに使用する文の長さは、15文字程度のコンパクトな文が適切だと考える。

5. 語彙と文型パターンの定着について

学習者の日常に関連した語彙を練習文に使用し、その関連語彙を入れ替えた文も併せて練習することで、文型パターンの内在化が進むと考える。これにより、音韻ループに保存された音声記憶が長期記憶に転送され、必要なときに音声として容易に産出できるよう記憶される。練習させるフレーズには、否定文も併せて練習することが望ましい。ただし、「不可以 VO」「不能 VO」と「不会 VO」の使い分けについては文選定を慎重に行い、可能補語の否定形のフレーズ・シャドーイングと併せて練習することを推奨する。

6. 誤用文の修正及び活用

学習者が作文やテスト、授業などで産出した誤用文を正しい文に修正し、それをフレーズ・シャドーイングに用いる。

7. 語気助詞や推測文の練習

推測文「会/不会」の前に「一定」を用いた文や文末に語気助詞「的」を用いる文もシャドーイングに用いるべきと考える。例えば、「如果～，就会～的」、「要是～，可能不会～的」、「假如～，就会～的」、「只要～，就会～的」、「只有～，才会～的」など。

二. 授業内の指導手順

中国語の可能表現の文法学習と併せて、それぞれの文法項目を教授した後、応用練習としてフレーズ・シャドーイングを取り入れることを提案する。また、単語の入れ替えが可能な文を2～3文、連続してシャドーイングさせるのも有効であると考えられる。

例えば、

1. 明天的生日聚会/考试/茶道活动，我不会不去的。
2. 这次聚餐/音乐会/社团活动，我一定会去的。
3. 这次活动/卡拉 OK/打扫教室的工作，我参加不了了。

さらに、宿題や発表などで学習者が間違えた文を訂正し、その正しい文をシャドーイングすることも非常に重要である。そのため、間違いやすい文を集中的に取り上げたフレーズ・シャドーイングの実施を提案する。1回の授業で10～15分程度、目で文字情報を見ながら、教員の声あるいは録音を聞きながら1文字遅れでフレーズ・シャドーイングを行う。各フレーズを2回ずつ繰り返すこと、さらに次回の授業でも同じフレーズを

再度シャドーイングして復習することを推奨したい。

また、「你不可以~吗?」のような反語文に関しては、シャドーイングだけでは効果が十分に現れにくかった項目であるため、補完的な練習法として以下のような練習法を提案する。例えば、使用場面が明確な会話文を題材とした選択問題、穴埋め問題、正誤判断問題などを取り入れた練習など。反語文のように話者の語気が複雑で、文法的理解に加えて語用論的知識も求められるような文型においては、視覚的認知の強化も必要である。

例えば、

1. 用 AI 帮助写作业, 为什么哥哥可以, 我 (不可以/不会/不好) ?
2. 你累了可以在家睡觉不去上学, 为什么我就 (不可以/不行/不可能) 累了不去上班?
3. 他不是中文专业的可以不选修中文, 你是中文专业的怎么 (可以/会) 不选修中文?
4. 你不可说一下你的意见吗? (×)
5. 老师, 我们不可以明天交作业吗? (×)

最後に、本研究の今後の課題として、他の学習方法を用いて可能表現の習得を行ったグループとの比較対照研究を実施し、検証を深めていきたい。具体的には、今後、伝統的なドリル練習との比較研究やリピーティングを用いた習得促進効果との比較についても検討し、中国語教育現場にさらなる提言をしていきたいと考えている。

#### 付録資料

##### 一. 事前・事後測定に用いた問題

###### I. 中国語の文の正誤を判断する問題 (学習歴 10 ヶ月用)

- 1-1 田中同学, 你会不会早点儿来上课?
- 1-2 那件事我不会告诉他的。
- 1-3 快考试了, 你不会不好好学习了吧。
- 1-4 明天考试, 我很早就出发, 我不可以迟到的。
- 1-5 我的电脑不好, 我不会去上课了。
- 1-6 我可以喝酒, 但我今天开车, 我不可以喝酒。
- 1-7 老师, 休息的时候, 我会不会去一下厕所?
- 1-8 那位老人的身体好了, 她会跑步锻炼身体了。
- 1-9 下课的时间到了, 我们会回家了吗?
- 1-10 你有困难的时候, 我们会去帮助你的。
- 1-11 你说林娜明天会不会早点儿来上课?
- 1-12 我明天要去东京, 下午开会, 我不会回来呀。
- 1-13 你会告诉他一下, 你对这个问题的看法吗?

1-14 我们会在学完中级中文以后学习商务中文。

1-15 力波，你的网络不好，你不会去上课了吗？

II. 中国語の文の正誤を判断する問題 (学習歴 14 ヶ月用)

1-1 你的手机会不会忘在那家餐厅里了？

1-2 那件事我不会告诉他的。

1-3 快考试了，你不会不好好学习了吧。

1-4 明天考试，我们很早就出发，我们不可以迟到的。

1-5 我的网络不好，我今天不会去上课了。

1-6 我可以喝酒，但我今天开车，我不可以喝酒。

1-7 我明天有事，我不可以去参加大学的种树活动了。

1-8 那位老人的身体好了，她会跑步锻炼身体了。

1-9 我担心不锻炼身体，我就可以生病。

1-10 锻炼身体能对我们的身体好，对吗？

1-11 他说要来参加活动的，但没有看见他。他可能不可能是生病了？

1-12 你现在要去神户，所以下午开会，你不会回来，对吗？

1-13 你不可以告诉他你对这个问题的看法吗？

1-14 我们会在学完中级中文以后学习商务中文。

1-15 关于这个问题，我的单词量不够，我不可以很好地说明我的意思。

III. 学習歴 10 と 14 ヶ月共通問題日本語の文を中国語に訳す問題及び参考答案例

2-1 先生の質問を聞いて、理解できるかどうか聞くとき

你能听懂老师问的问题吗？/你能不能听懂老师问的问题？

2-2 この質問に対して、答えられるかどうか知人に聞くとき

你会回答这个问题吗？

2-3 昨日の宿題が理解でき、やることができたかどうか知人に聞くとき

你能理解，也会做昨天的作业吗？

2-4 あなたの秘密を他の人には言わないよ、と知人に伝え安心させたいとき

我不会把你的秘密告诉别人（的）。

- 2-5 ある問題の解決方法を教えてくれるかどうか聞くとき  
你能不能告诉我解决这个问题的办法？你能告诉我解决这个问题的办法吗？
- 2-6 この宿題がまだできていない人は、休憩しないように伝えるとき  
还没有做完作业的同学，不能休息/不可以休息  
(厳しい言い方や中国南方系の人の言い方)。
- 2-7 なぜまだケーキを食べてはいけないのか聞くとき  
现在为什么还不能/不可以开始吃蛋糕？(中国南方系や若者：不可以开始吃蛋糕)
- 2-8 知人に、彼は私の秘密を他の人に言うかどうか聞くとき  
你觉得他会把我的秘密告诉别人吗？
- 2-9 二歳の子供に、自分で服を着られるようになったと知ってはいるが、この服はまだ自分で着られないので私が手伝ってあげるよ、と伝えるとき  
我知道你会自己穿衣服了，但是这件衣服你还不会自己穿/你自己还穿不了，我来帮你。
- 2-10 車の運転はできるが、腕を怪我してしまい、今は車の運転ができないと伝えるとき  
我会开车，但我的胳膊受伤了，现在我不能开车了/开不了车了。

## 二. 「能、会、可以」と可能補語のフレーズ・シャドーイング用練習資料 (一部)

### 会Ⅰ. 習得し、身につけた基礎能力の「～ができる」

- 1 我会唱两首中文歌。
- 2 我会写中国和日本的汉字。
- 3 我会用电脑，我用得很好。
- 4 我会说三种语言，我朋友会说四种语言。
- 5 我弟弟现在两岁，他还不会用手机。

### 会Ⅱ. 推測の「会」

- 1 明天可能会下雨，她不会来 (的)。
- 2 我会去参加你的生日聚会 (的)。
- 3 上汉语课的时候，我不会说韩语 (的)。
- 4 他很喜欢吃蛋糕，他不会不吃 (的)。
- 5 明天我们不会迟到 (的)，我的朋友也不会迟到 (的)。

### 能

- 1 他的英语很好，他能教你英语。
- 2 我一个人能吃两个人的咖喱饭。

- 3 我现在好了，能去健身了。
- 4 明天，你能早点儿来教室吗？
- 5 我要去留学，不能回东京老家了。

可以

- 1 你可以写一下你的汉字名字吗？
- 2 准备好了的同学，可以回家了。
- 3 你可以一边听中文歌，一边学习汉语。
- 4 我可以看一下你的作业吗？可以可以，当然可以。
- 5 学生：我们可不可以不参加考试？ 老师：什么?! 当然不行。

可能補語

- 1 我的手机不好了，看不见你。
- 2 我的汉语不太好，听不明白你说什么。
- 3 这个生词什么意思，我看不明白、看不懂。
- 4 明天我要去打工，你的生日聚会，我参加不了了。
- 5 我很喜欢写汉字，可是还写不好。

参考文献

- Atkinson, R. C., & Shiffrin, R. M. 1971 The control of short-term memory. *Scientific American*, 225, 82-90.
- Baddeley, A. 2000 The episodic buffer: A new component of working memory? *Trends in Cognitive Science*, 4, 417-423.
- Craik, F. I. M., & Watkins, M. J. 1973 The role of rehearsal in short-term memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*. 12, 599-607.
- Hiramatsu, S. 2000 「A differentiated/integrated approach to shadowing and repeating」『中国短期大学紀要』,第 31 号, pp.311-322。
- 荒川清秀 1992 「助動詞」『中国語』,第 3 期, pp.17-21。
- 相原茂 1991 「能、会、可以」『中国語』,第 1 期, pp.30-33。
- 相原茂 2000 「絶滅寸前!? “不可以”」『中国語学 Q&A 101』,大修館書店出版, pp.152-154。
- 相原茂・石田知子・戸沼市子 1996 『Why?にこえたるはじめての中国語の文法書（新訂版）』,同志社出版, pp.175-179。
- 張麗 2008 「留学生“会”与“能”的使用情况分析」『暨南大学花纹学院学报』第 3 期, pp.53-58。
- 古川典代 2011 『聴ける話せる中国語応用編ーシャドーイングメソッドを使って学ぶ中国語ー』,金星堂出版, pp.22-24。
- 呉麗君、西川和男 2005 『中国語の誤用分析』,関西大学出版部, pp. 109-117。
- 玄宜青 2000 『中国語学 Q&A 101』,大修館書店出版, pp. 159-160。
- 長谷川正時 (2005) 『通訳メソッドを応用したシャドウイングで学ぶ中国語文法』,リーエーネットワーク出版, pp.7-73。
- 郭春貴 2001 『誤用から学ぶ中国語』, 白帝社出版, pp. 33-37。
- 郭春貴 2014 『誤用から学ぶ中国語 続編 1』,白帝社出版, pp. 101-127。
- 郭春貴 2017 『誤用から学ぶ中国語 続編 2』,白帝社出版, pp. 34-48。
- 勝川裕子 2011 「可能の助動詞“会”の表現機能と「上手い」への派生について」『中国語教育』,第 9 号, pp. 101-114。

- 門田修平 2007『シャドーイングと音読の科学』,コスモピア出, pp. 11-237。
- 門田修平 2012『シャドーイング・音読と英語習得の科学』,コスモピア出版, pp. 11-299。
- 倉田久美子・松見法男 2004「日本語指導におけるシャドーイングの基礎研究(2)ー音読練習との比較調査からわかることー」『2005年度日本語教育学会秋期大会予稿集』, pp.241-242。
- 胡玉華 2009『中国語教育とコミュニケーション能力の育成ー「わかる」』中国語から「できる」中国語へ』,東方書, pp.144-154。
- 黄麗華 1995「中国語の可能表現「能」「可以」「会」」『日本語研究』,第15号, pp.78-87。
- 小柳かおる・迫田久美子 2006「第二言語習得研究と日本語指導」縫部義憲(監修)・迫田久美子(編集)『講座・日本語教育学第3巻言語学習の心理』,第3章,第1節,スリーエーネットワーク出版, pp.95-125。
- 松見法男 2006「言語学習と記憶」縫部義憲(監修)・迫田久美子(編集)『講座・日本語教育学第3巻言語学習の心理』第3章第1節スリーエーネットワーク出版, pp.128-160。
- 松田春奈 2015「日本人中国語参加者の誤用とその教授法・中国語の教科書の問題点についてー可能・可能性を表す助動詞“能”と“会”を中心にー」『名桜大学紀要』Vol.20, pp.15-28。
- 来思平、相原茂 1993『日本人の中国語ー誤用例54例』,東方書店出版, pp.92-95, 164-169。
- 李賽 2012「対外汉语教学中可能补语的教学」『Jurnal Bahasa dan Budaya China』,Vol.3, No.1, pp.25-34。
- 刘月华 1980「可能补语用法的研究」『中国语文』,第4号, pp.246-257。
- 劉月華・潘文娉・胡韡著 1996『現代中国語文法総覧』,相原茂監訳,くろしお出版, pp.157-161, pp.479-492。
- 魯曉琨 1993「不能VR」と「V不R」『中国語学』,第240, pp.77-83。
- 魯曉琨 2004「助動詞“会”の語義探索及与“能”の対比」『国際汉语教学讨论会论文集』, pp.428-442。
- 盧濤 2006「汉语助動詞使用錯誤分析」『広島大学大学院総合科学研究科紀要1巻人間科学研究』, pp.105-114。
- 大江元貴 2015「中国語の可能形式“能”、“会”、“可以”ー可能概念を構成する力に着目した分析ー」『文藝言語研究言語篇』,第67期, pp.41-67。
- 酒井弘 2006「言語学習と記憶」縫部義憲(監修)・迫田久美子(編集)『講座・日本語教育学第3巻言語学習の心理』,第1章第3節,スリーエーネットワーク, pp.30-42。
- 讚井唯允 1996「助動詞(能,会,可以)」『中国語』,第10号, pp.56-59。
- 史有為 1994「得说“不能来上课了”」『汉语学习』,第5号, pp.28-29。
- 柴森 2016『中国語の構文攻略ドリル初級から中級へ』,白水社出版, pp.110-115。
- 杉村博文 1991「可能を表す助動詞と補語」『中国語学Q&A101』,大修館書店出版, pp.155-158。
- 朱徳熙著、杉村博文、木村英樹訳 1995『文法講義』,白帝社出版, pp.74-77。
- 祝岩屹 2015「能愿动词“会”“能”“可以”的教学构想」『语文教学通讯』第858卷第10期语文教学通讯・学术, pp.59-60。
- 玉井健 2005『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』風間書房, pp.3-55。
- 吉田泰謙・安本真弓 2018「中国語可能表現の習得状況に関する考察ー大学における調査結果を中心に」『関西外国語大学研修論集』,第108, pp.151-168。
- 楊佳麗 2012「言語能愿动词与英语助動詞偏誤分析及教学策略」『语言研究』, DOI:CNKI:SUN:WXJL.0.2012-07-045。